
 学 会 記 事

第 57 回新潟脳神経外科懇話会

日 時 平成 22 年 12 月 11 日 (土)
 午前 10 時～午後 3 時
 場 所 新潟グランドホテル
 常磐の間 (5F)

一 般 演 題

1 出血性梗塞を発症した妊婦の 1 例

鈴木 倫明・富川 勝

刈羽郡総合病院脳神経外科

症例は 34 歳，女性，左利き，初産婦であり 10 数年間不妊が続いていた。妊娠 9 週頃より強い頭痛が続き，意識障害・右片麻痺が出現したため救急搬送された。CT で左側頭葉から頭頂葉にかけて出血性梗塞をみとめ切迫ヘルニアの状態であった。MRI で左 S 状静脈洞に血栓像をみとめ，静脈洞血栓症による静脈性梗塞が考えられた。緊急外減圧術を施行した。術後の採血でプロテイン S 活性 35 % (正常値 60-150)，プロテイン S 遊離型抗原量 73 % (正常値 60-150) であり，プロテイン S 欠乏症による静脈洞血栓症が考えられた。術後はヘパリンによる抗凝固療法を開始した。リハビリテーションにより右片麻痺は改善，ゲルストマン様の失語，失算失書を軽度みとめた。経過中に頭痛嘔吐，感覚性失語が出現，CT で右急性硬膜下血腫が出現しており，血栓症との関連も考慮して脳血管造影を施行した。動脈系に異常をみとめず，左横静脈洞はほぼ閉塞したままであり，右横静脈洞に一部血栓像が疑われた。開頭血腫除去術と同時に頭蓋形成術を施行した。出血源は明らかではなかった。術後，症状は改善をみとめり

ハビリテーションを継続した。産婦人科へ転科となり，妊娠 38 週目に帝王切開術を施行，児を無事出産した。出産後はワーファリンの内服を開始した。再発はみとめていない。プロテイン S はビタミン K 依存性タンパクであり，活性化プロテイン C の補酵素として働くことで第 V a，Ⅷ a 因子を不活性化して凝固阻止に働くが，プロテイン S 欠乏症ではそれがうまく働かないために血栓症を引き起こす。先天性プロテイン S 欠乏症は常染色体優性遺伝であり，約 2 万人に 1 人の割合でみられるとの報告がある。妊娠や経口避妊薬，外傷など凝固系を賦活化させる誘因で血栓症を発症することが多く，本症例では妊娠が誘因となって脳静脈洞血栓症を発症した。

2 外傷性内頸動脈前壁動脈瘤破裂によるクモ膜下出血の 1 例

吉田 雄一・恩田 清・本多 拓

渡邊幸之助・新井 弘之

新潟脳外科病院脳神経外科

症例は 72 歳，男性。2010 年 9 月 14 日ヘルメットを装着してバイクを運転していたところ，後方からダンパーに追突されて転倒し，右半身を打撲。9 月 25 日朝後頭部の痛みで目覚め，同日当院を受診した。来院時，意識清明，頭痛を訴えるが神経学的には異常なし。MRI でクモ膜下出血と両側前頭葉に脳挫傷と思われる病変を認めた。クモ膜下出血は左内頸動脈頂部～シルヴィウス裂を中心に分布。MRA では左内頸動脈前壁に動脈瘤様陰影を認めた。発症後 6 時間以上経過するのを待ち，血管撮影を施行。左内頸動脈前壁に長径 3.7mm，高さ 0.7mm の隆起を確認した。病歴，クモ膜下出血の分布，血管撮影所見から外傷性内頸動脈前壁動脈瘤の破裂と考え，緊急手術を施行。クモ膜下血腫を慎重に除去しながら内頸動脈前壁に至り，動脈瘤に少量の血腫が付着した状態で内頸動脈の全周を露出した。次いで Bemsheet を用いた clipping on wrapping を行った。術後合併症はなく，血管撮影で動脈瘤の縮小を確認。患者は独歩にて退院した。